



松島勝譜

ル 4
4962



明治二十一年七月刻

松島勝譜

大槻文彦校訂
作並清亮編纂

觀瀾亭藏版



和亭、寛政、玉皇、
大槻、盤、淺、
白、山、柳、
右、大、家、寺、古、魚、柳、入

奇

雨

子

齋

門
號 4962
卷

松島觀瀾亭扁額

從四位上左近衛權中將兼
陸奥守吉村朝臣真蹟

仙臺養賢堂頭平泉松島先生書

松島

了之探山少平
又少海來今
曰究走說松河

平泉

松島

真蹟

中月一景 暮色に照らす
舟に安寝を管廬の軒下
袖に如らゆく 書

天下有山水各擅一
方美衆美偉松
洲多心無山多

杉崎一海 東山道人 壬午年書

仙臺瑤島寺南山禪所書



松陽烟波碧海流
瑞巖東畔多仙舟
潮通棘錫之千里
雲接蓬萊古十洲
一洗身心皆似水
平分世界捲如浮
東風忽送它山雨
隔岸樓臺鎖暮愁

南山七十五史

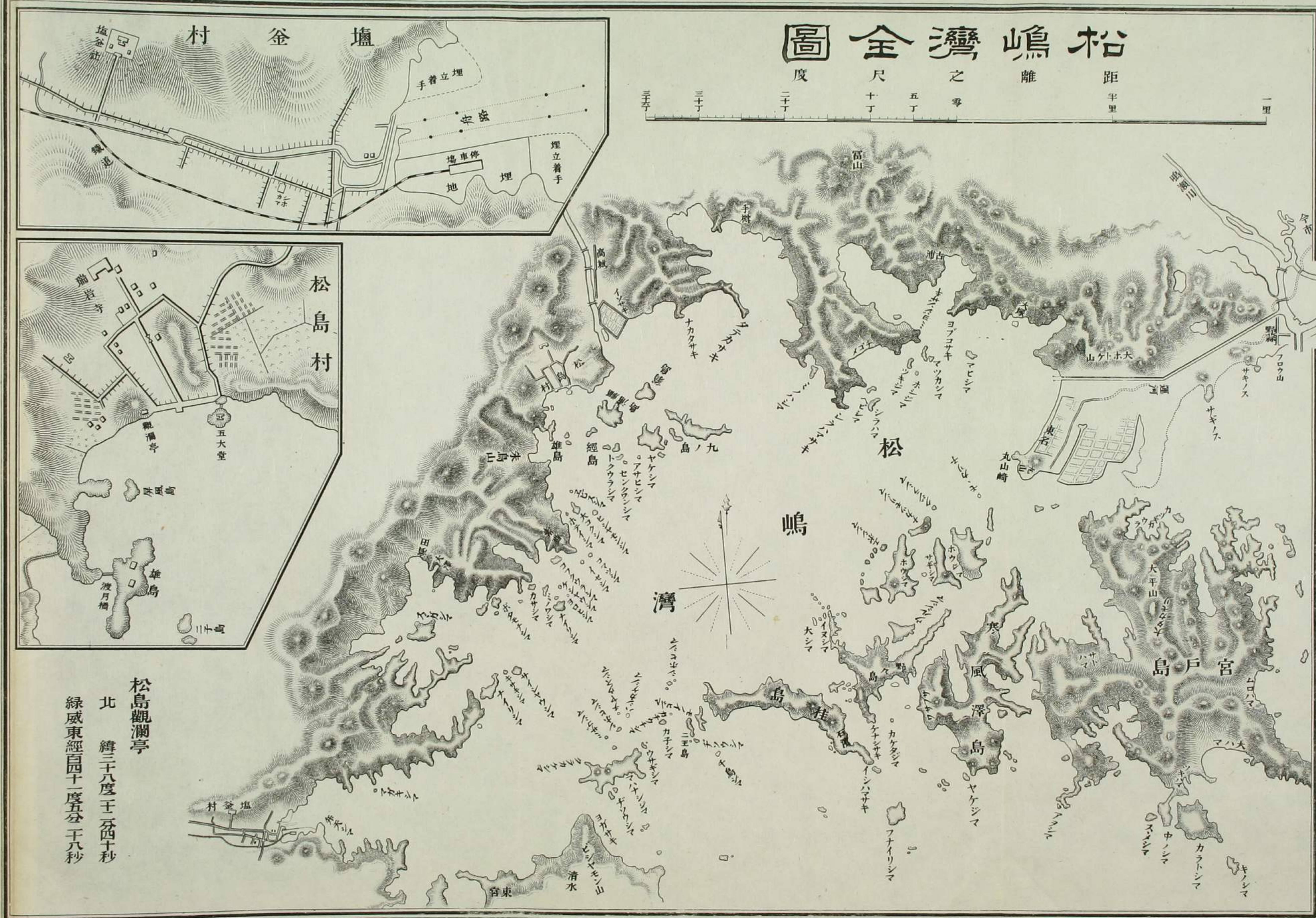


仙臺瑤島寺南山禪所書

仙臺瑤島寺南山禪所書

松嶋灣全圖

距離之尺度



松嶋觀瀾亭

北 緯三十八度五分四十秒
 綠威東經一百四十五度五分十八秒

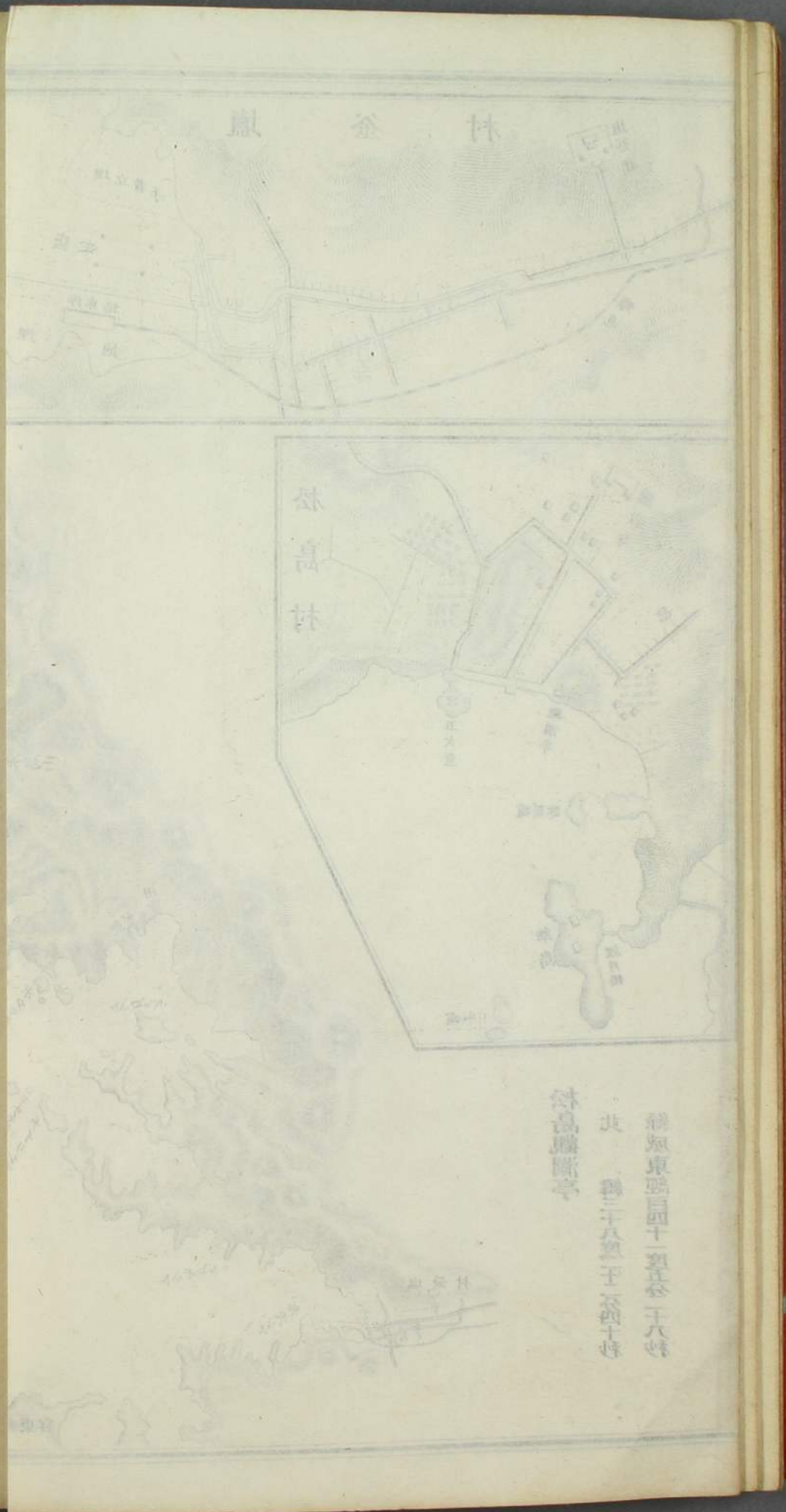
松嶋勝譜附圖

明治二十一年七月製

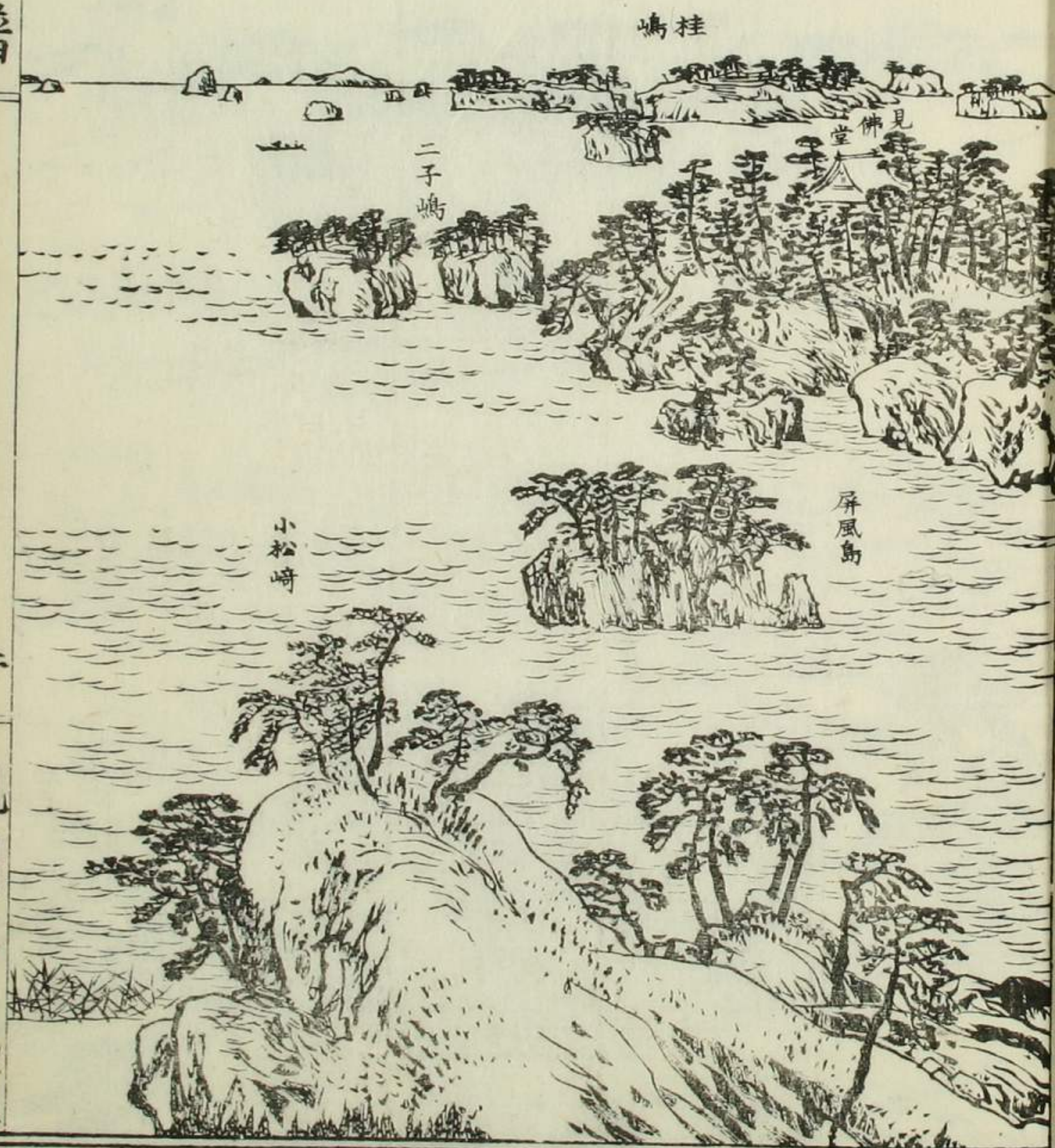
松島真景

公鳥券並

一
見關亭歲反



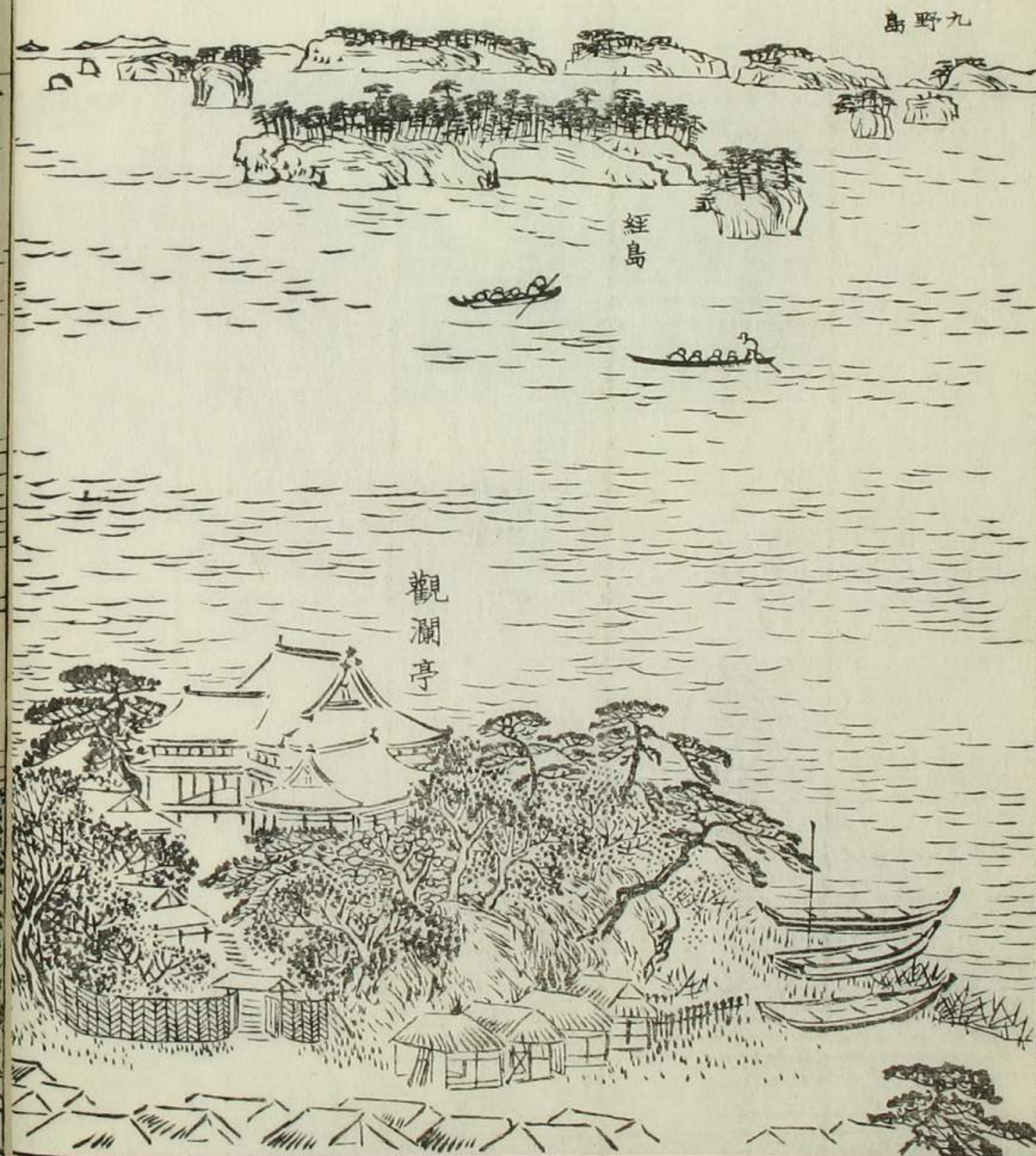
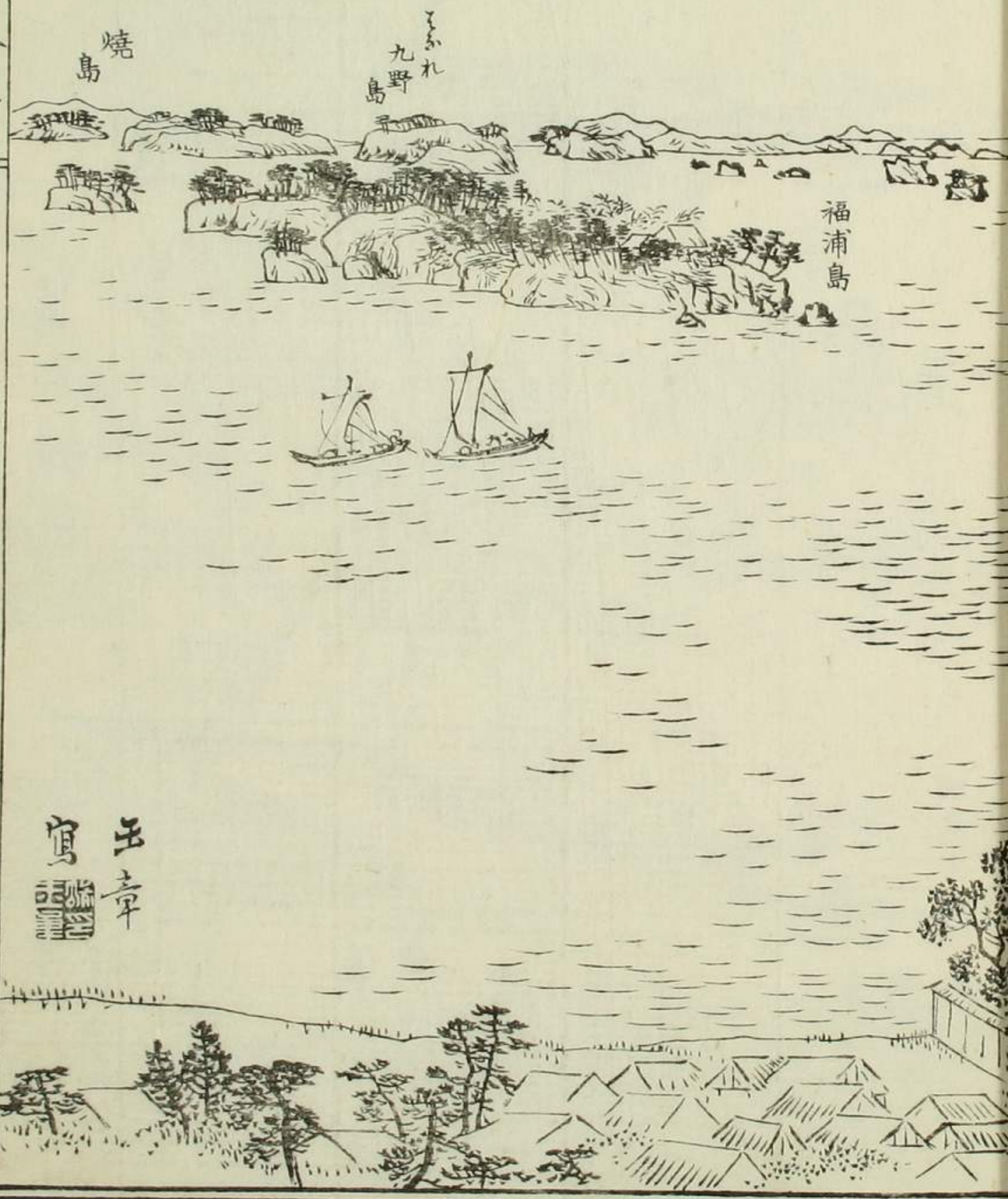
松島東園十二景在松島
共 松島園
松島園



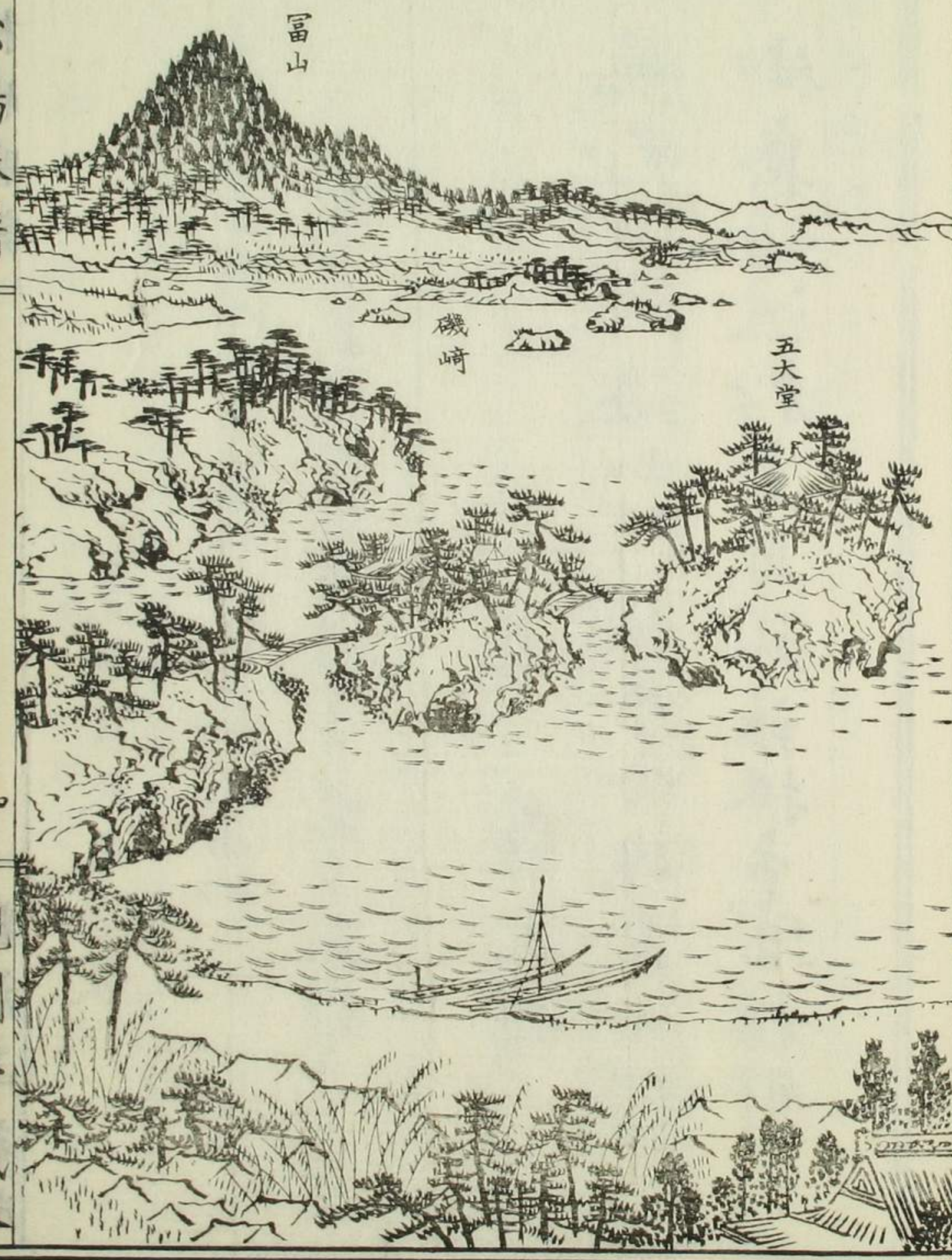
其一

五章
印



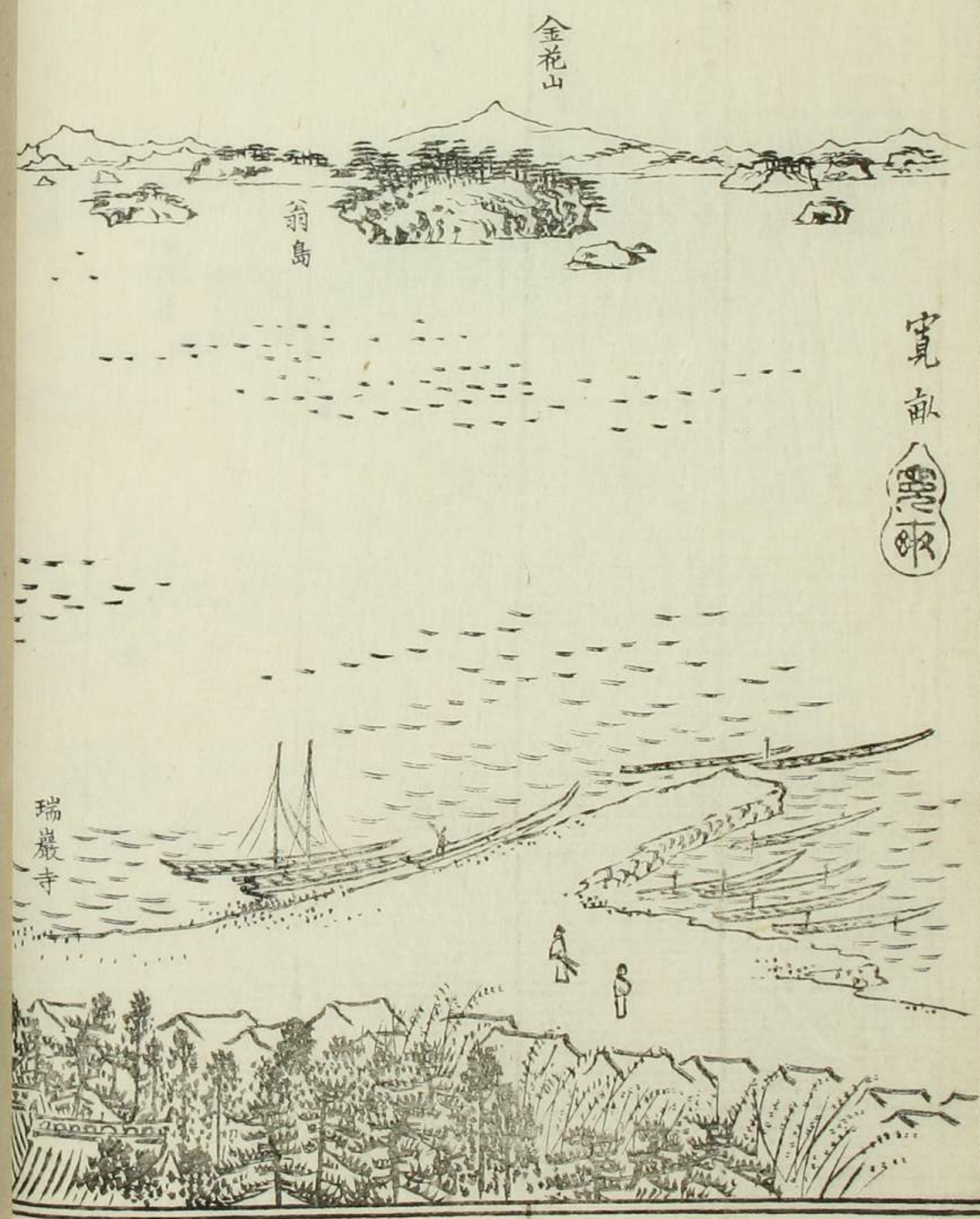


八
馬
長
八
位
目



四
見
日
山
八
人

三 其



本
山
月
言

寛
政
〇
〇

寛
政
〇
〇

瑞
巖
寺

皇后宮大夫俊成

立つて海も東に見む松島也

をまの宮屋浪りあゝ如也

元 薩天錫

風光招我海山阿拍手吟魂奈句何
御島煙波松島月到茲捲舌富樓那

松島勝譜

我が邦内山水の美をいへば松嶋を以てその冠絶とす
然まやも其地東陬より我以て此より遊ぶ者多うらば
偶遊ぶ者あれども其區域廣大なき一朝一夕小景
を盡す能はずして纔り其一部の美を觀て喜ぶるの
み世に松島や安藝の嚴島と丹波の天橋立とを日本
三景と稱するに始て日本事蹟考り見えたるに
も所謂衆盲摸象の言ふに決して此肩すべきものに
阿らば新井白石先生嘗て松嶋を以て古へり稱せし

霞の蓬萊ありとせり南山禪師詩有り天下有
 山水各擅一方美衆美歸松洲天下無山水也
 大槻平泉翁も天下探山水五十又八州歸來
 人有問究竟說松洲の什あり今や鐵路の線東
 京より塩釜^{ふたつ}達せ東限一百里の地も朝日發し
 て夕日^{ゆふひ}到るべき便を得れば此地小遊むん者そま
 必多うらん因て今これが為り指南車を作る

松嶋の陸前國宮城郡東北海をり有り松島の名稱は今
 を距る古と一千二百五十餘年前舒明天皇三年ふ陸
 奥國宮城郡松島八幡奉勅使のこぞ類聚國史に見

之なきは其以前幾許年に始まりや知られず又一説は
 聖徳太子達摩を待ちたまひし地有り因て古へは待島
 と書けりともひり或は鳥羽天皇の時よ起れりといひ
 又ハ右大将頼朝の夫人平氏より始まりともひり其誤
 ちるべきは紫式部が源氏物語清少納言の枕草紙その
 他古人の和歌より徴して明かりさて其景色ハ廣く塩釜^{しほがま}
 松嶋^{まつしま}手樽^{てづか}璣崎^{よかざき}吉田^{よしか}花淵^{はなぶち}宮戸^{みやと}寒風^{さむかぜ}澤等^{さわら}の數村より跨
 れども特に松島村ハ風色尤も美なるを以ては總稱とを
 ちまざるふらふし○せり八百八嶋ありといふハ大小の島
 々數おほむをいふ詞あるべしな海面より相あらひて碁

桐子石をもちたるが如くいづきも争ひて奇状を呈す中
 も古より名高きハ雄嶋あり名なき小嶋ハ幾何ある哉
 志らば其嶋ハ天造の自然ふ出で前より見るや後より
 詠むるときあぐの形をまして棹をすす免舵をめぐり
 に随ひて千態萬状うご(盡し難きが故小里人と以て
 ども何まねく其名を知らざるもありさきバ其見ゆる姿と
 以て以て八百八のいふもおろのちるごし佐久間洞窟翁
 曰白鷗飛衝その洲ハ啄み緑鴨群驚るは涯り集る浩
 とたる烟波ハ歸帆々有無し累々たる嶋嶼ハ釣舟た
 ちまち出没す萬松月を蔵めて斜めり葉間の金を碎

き遠汀風と含みて鮮り江上の雪を崩す王祭が遊海賦り
 所謂若夫長洲別島旗布星峙桂蘭叢于其上珊瑚周
 于其址といひしもの此松嶋ハ彷彿として寔り天下の絶景
 古今の勝迹ふして扶桑の一滄洲ありといふ(凡東海
 ハ何もの慶も浪うらぐ朝夕をげくして日和よく風静ある時
 も浪聲耳ふ喧したる此松嶋ハ海表り數十の洲嶼並びて
 さくふるの故り絶て浪なく海面平ふを鏡の如く碧碌
 澄徹して面とうつし見るべし其中ハ數十の島々何れも
 譬へば三千の宮女装と凝して宮房は列まると如く画も及
 びざる所あり○此嶋々松を以て名づらるまやハ殊り松樹

多々れを有りその松ハ根を巖石よらせ枝幹ハ海風ヲ撓
められて屈曲偃蹇したるさゆ臥まが如く倒るゝが如く其
海面ハ俯し多々ハ龍蛇の水ヲ入るのや疑ま多々さま筆
の及ぶ處さふゆづば○凡何國の海客も地ハはききたる處
ハ沙汀斥鹵となりて清潔あらすさるに此處大小の島
々々断岸とありて多くハ下狭く上廣うて今や崩きんとす
る姿を那し或を樹根をあらはし或ハ奇石と出以島ごとに
皆此の如し○古來松嶋八景と稱するものゆり鎌倉建
長寺の主僧靈巖始めて傭を作きり一説ヲ後水尾院の
御製といふ其目ハ 梅浦春景 霞浦歸雁 市麩漁家

雄嶋晚眺 塩竈暮烟 山寺晚鐘 松島秋月 竹浦
夜雨 されあり每區ハ靈巖の詩及び歌ハ後ハ宮埜堯
夫といふものあり亦八景の詩を賦して少く其目を變ド
たり正徳中藩主中將吉村君親ら塩松八景を撰し京師
の縉紳名族ヲ請ひて各歌を詠せしめられぬ其目を
塩竈浦船 雄島旅雁 觀月崎月 蕭寺晚鐘 籬嶋夕
照 浮島翠松 海濱漁火 富山暮雪 たり世人靈巖
ガ撰せし古八景といひ君の撰せしとを新八景と稱
す其他十勝十二景等の目猶多し又土人勝を説く者七
浦八崎八嶋といふ七浦ハ 梅浦竹浦 霞浦 瀟浦

嘉多浦 光徳浦 胡桃浦をいひ八寄ハ 觀月崎 龜
 首寄 龍首崎 象鼻寄 寶珠崎 小松寄 洲寄をい
 ひ八嶋ハ 雄島 經嶋 翁嶋 屏風嶋 孿生島 福浦
 島 徳浦島 旭日嶋をいふ今按むるより以上いふ松嶋
 村傍近むむの々と舉げていふものなきは松島全勝の
 公論といひむづたうし ○松島を遊ぶもの塩竈より
 舟行するは善しといふ舟行するはぐれば山水の美嶋嶼の
 奇を盡すこと能はず 塩竈ハ仙臺を距るは東五里
 ふしと近しその沿道より宮城野木の下國分寺玉田横
 野 燕澤 蒙古の碑 興の井 末の松山 多賀城の碑 野田の

玉川等の古蹟あり 桑蒼の變りて舊觀を失はるものも
 好古の士に行きて尋ねる中にも多賀城
 の碑を天平寶字六年は惠美朝猶の造建り係り見雲
 真人の書ありて一千年前の古と傳へたりを觀るを得
 べきものあり

○塩竈浦 或ハ千賀の浦ともいふ左ハ松嶋を接し右を
 東宮嶼崎の諸濱に鄰り正面ハ萬頃の曲灣ふして空中
 島嶼碁布星列し雲浪烟波あるは城醜し其景致の
 美ありて名状を盡さば河原の左相ハ其奇勝
 を遙慕して京洛の地を模造し在五中將ハ親ら此地

子遊び彩毫を揮て紀行を作らむに伊勢物語も
 我が皇國六十餘州中山水の奇絶あるハ塩竈の浦ふ比
 まはるきものなるといりあつたをみるに商船漁舩此
 輻輳し妓樓軒をたぐひ絃歌曉ふ徹し實は繁花の一都
 會あり今や鐵路開通し停車場を此に置き東京より十三
 町ありて遠きも城得るなり至きなり

○塩竈神社 武甕槌命を以て左宮とあり経津主命
 を以て右宮と解し塩土老翁をもて別宮とあり縁起
 曰く塩土老翁始て此浦に降り塩を煮て民に教ふと神釜
 四口今猶存して本社南麓二町餘ある市店の間あり

三口ハ徑四尺八寸ありて一口ハ四尺あり深き僅は二三寸
 或ハ四五寸厚さ三寸許あり實は上古神明自ら塩を
 煮たまひし器とて曠世の古物といふなり此神釜より
 りてあつたの浦の名も生じたるを知るべし僧宗久が紀行に
 ありて本社も當時のありに在りて神釜を以て神體と
 ありたりしものと見ゆ仙臺黃門政宗卿ふ至りて其地
 湫隘囂塵ふるを以て紀伊國の良匠鶴右衛門といふ者と
 召し慶長十二年の夏新の社を山上に經營せられぬ卿
 が四世の孫中将綱村君より至りて更は其規模を大にし
 たまひ廟宇益々鉅麗を加へ華表を扁して陸奥國

一宮といへば枝祠十五ありて所々小散祀す祝官巫女
 凡て二十九人を置き毎歳七月十日を以て大祭の日やふ
 一満潮の時を待て幣牲を奠供すと云り維新の後小
 岩切村の鎮座あり志波彦の神を此に遷し合祭し
 國幣中社と列せり宮社の説は曰延喜式所謂志波彦神
 社者乃指塩釜焉志波志保訓相通彦者老翁之美稱
 栗原郡志波姬神社曰體神也○廟門の右に鐵燈有り
 高九尺餘にして窓扉は日月の形を穿ち奉寄進文治三
 年七月十日和泉三郎忠衡敬白の十九字を鐫りた皇忠
 衡は藤原秀衡の弟なり○本社の東南小寺あり金光

明山法蓮寺といふ従前神佛合祭せし日すは本社の祭祀
 と掌り十二枝院ありき寺中より勝画樓洗眸閣より塩浦
 第一の眺望なり法蓮寺より東は沙汀あり翠松磯といふ其
 北は青山より藤蔭山といふ其麓は藤蔭隈といふされど近年
 土工を起して次第より埋立てもとの海中に停車場を建て
 るれば古きらの名區も今に見ると出らなむるを感す

○塩竈浦より左岸に浴を屈曲して松嶋より接し芳津
 濱田より其間より女郎山 小松崎 阿母懷 芳津山
 上野 一株松 獅子崎 崎山 蛇嶋崎 神釜淵
 神釜崎 俎浦 本善浦 梨花灣 翠杉灣 赤崎

白洲濱等の勝區なり

○芳津山 芳津濱あり或ハ略して芳山といふ山上小

梅宮の祠あり祠をめぐり梅樹環繞して花時乃至れば遊

人甚だ多し祠前の眺望寂も佳なり東宮璵寄の諸濱

より桂嶋野々島寒風澤諸嶋に至るまで一瞻り集る

故より其勝を目して芳山の麗觀といふ塩松五山の一とい

○塩浦の右瀕海より漁農の村落をあすものセツあり

東宮 璵崎 吉田 花淵 菖田 松濱 水門 これを七

濱と稱さその勝境の佳絶あること遊客の必ず遺蹟と

いふる處なり其間ハ芝浦 藤嶋 並濱 天満嶋

篠浦 葉柴崎 大木戸浦 鬼頭崎 牛渚 鑿通

千代崎 要害灣 東宮濱 清水濱 等を経て璵寄

小至る

○璵崎 又代崎より作る漁農四十餘戸あり東北ハ躑躅

神馬諸嶋に對しその間僅ふ百餘歩なり是を塩松環

海五口の一といふ波濤これより西せど近年一大養魚場

設けて數萬尾を畜ひ遊客の好む所より隨ひて鮮鱗を調理

す味ひ尤も美あり

○多門山 璵寄より舊名ハ葉峯享徳中濱民網を下して

多門天像を海中より得て是を祭まり爾來多門山と呼べり

山上瞻眺ある處塩松東南の勝一目して盡き、舟山
萬年定めて五山の一とす、水の誠ふ當まり

○吉田濱 漁農四五十戸あり、瑛寄花淵兩濱の間、はらり後
丘は吉田神祠ありて老樹環繞す、富山大高の諸境より遠
望されむ、たか蒼々たるもの、古の祠あり

○花淵濱 吉田濱の南十餘町あり、封内名蹟志より曰
く花淵舊鼻節濱より作まり、濱は鼻節神社あり、小因て
名づくや、延喜式神名帳ふ載する所の宮城郡四座の一なり
人家七八十ありて、縦横より蒼を為さる南を花淵崎といふ
石壁百餘仞ありて、東南は海より枕む塩浦の右沿海の地東南

して瑛崎より至り、瑛崎より南ふ折き二十町にして、古く小至
り是よりハ又折れて、あやふか葛田松濱に至る故より、此寄りの角は
在りて東南大洋潮汐の衝は當りされば、洪濤その脚を蹴
て、頽波翻激し、其響雷の如く亦觀濤の一奇なり

○一木亭 花淵濱よりあり、天正壬午の春たましく一巨木
ありて海濱は漂寄せり、里正宗久といふ者見て大鯨なり
や、し濱民を驅りて捕獲せんとし、近づきて古き城視まが
巨木なり、い乃ちその木を以て此亭を建てたり、何の木
あるの志れず、棟梁桶椽構檣椳闌總て一木を割きて造
まりといふ、府土萬葉及び奥州俚諺集にハ其木長二丈四

尺圍二丈八尺五寸ありきと有り

○菖田濱 しやうぶつてま 花淵の南三十町あり其間小葦峯金色汀 ふらふらみ ちせううら

赤羽湖等 あかむいぬま ありこの濱人家百餘有り近年海水浴場設

設けて遊客頗多しちまより十餘町ふて松濱あり

○松濱 まつつてま 古よりいひ松が浦嶋はこれなり漁農八十餘戸半

ハ崖上より半ハ沙汀有り故ハ波濤の餘勢常ハ檐下ハ

及ぶ濱地海へ入るこよ百餘歩ゆて断崖最も高くその

上より長松羅列すちまきと觀江臺とハ藩の先君亭也其

上より建て遊息所とせしむ故ハ御殿崎とも呼べり亭ハ

今廢せり臺上より眺むれば南ハ相馬岩城の諸山より西

ハ羽の諸嶽あり及び東南ハ滄溟漂渺として天より連るこ

の濱ハ紫藤花を以て著るれ其の處特々多し松枝より縁

り断崖より垂まて暮春初夏ふハ花盛に開きて霞の如く

雲より似たり崖下の白浪と相映して真ふ奇觀なり古人

の詠歌ハ此處を賦せしむるまて臺下にハ奇石尤多く

して退潮のむを石悉く出でて奇形萬千ありて名状

す辱るべし且石間より鰻魚多し捕りて食ふハ塩醬を用ひ

むしく味ひ却て美あり故ハ御殿崎の干潮七濱の地引網 ちびきあし

と従来一對の壯觀とせり塩浦より右方沿海の勝ハこ

ふ至りて盡く

○まがき芭籬島 しほ塩浦の海汀を距るこや十餘町あり或は
 間籬はく芭嶋籬嶋は作る鹽浦より松島より至る海上
 二里餘の舟路より島と見るこよまきを初めとす島上竹
 樹の樹とて神祠あり鹽浦の勝中最も奇觀とあり
 こや猶松嶋の雄島は於けるが如し故に古來搢紳の詠歌
 いと多し島の四邊は介あり梅花貝と名づく其色皎潔し
 て梅花の如し二三月の交この嶋より遊ぶ者誤て真花と
 ありとされや嶋上を探るに梅ハ一株もふり源俊頼が籬
 嶋梅花貝の詠あまば數百年前より已よりまき賞せ
 りと見えたり探勝の客これ拾ひて庭際ふと撒せ

バ不時の花を見るべし ○まきより松嶋はいたる東北の
 間より鷗羽嶋 天女嶋 見賀小嶋 蟾蜍島 或ハ高麗
 蛇島 裸體嶋 或ハ 夜盜嶋 宰相島 女御島
 或ハ 右嶋 等を経て左に折るれば 伊吹嶋 牡丹餅島
 黄崖嶋 馬脊嶋 擲筆嶋 小福浦島 箕輪島
 鎧島 堯島 觀蹟聞老志 挂鞍島 燈島
 艶粧島 伊勢嶋 小町島 毘沙門嶋 大國島
 蛭子嶋 布袋嶋 孿生島 等を左右ふ見て松島の洲崎
 巷は達するなりこの嶋嶼分きて波間は列をなすはいそ
 うとふり各形勢よりて名づく見えたり中にも女御

嶋の如きハそのさほ婦人中饋と被り侍女數輩と従へて
宮掖ヲ朝暮るふ似たり蟾蜍島ハ其形似最も真ふ逼れ
る鎧兜もまた各其形ヲ彷彿たり其餘も亦かく如
し

○松嶋村 南ハ千賀を極め北ハ磯寄左ハ五大堂右ハ雄
島ふして陽徳瑞巖圓通天麟等の寺院ハ後山の蒙密
ヲ隱き福浦般若經島翠柳仙冠繪島の諸島その前
ふ分布し遠望の地ハ宮戸寒風澤鳳嶋野々嶋桂島
石濱等烟波ヲ浮ぶ津頭の居民二百餘家市街をなし
て客館二あり一を水明樓といひ一を松明樓といふ○此

村維新前ハ皆瑞巖寺の所領ナリとすゞ殺生と禁じ
たる所の故小鳧鷗の類も人小馴れて驚うも又大魚岸小
近づき潮を蹴て躍り出づ事あり夜ヲ入て其音をきく
可ハ殊ヲ幽靜の趣を助く○此地風景の美あるはや春
夏秋冬とわづらば又晝夜曉夕晴雨風霜雪月とも
美なるざるハあり中も妙あるハ雪朝月夕まり見慣れ
し里人も目を驚うして思ふが手を拍て叫ぶんとする事あり
りといふ誠り人間はあまふ境界ヲ知らば○毎年七月
十六日の夜大施餓鬼として海上ヲ百八の燈籠を流し遠近
羣聚して是を見ら其光海を涵し天を照らして數多の

嶋々燈花の流るゝに随ひて或いはあつたれ或いはくさほ
たふふなき詞をくし

○松嶋浦 南ハ霞浦ニ至リ北ハ磯崎ニ及び東ハ宮戸寒
風澤の諸嶋を極めその中間數里の處古來總てまきを松
嶋浦と稱も江上幾多の洲渚と波間無數の青螺と矯立
基布せる状恰も白銀盤上ニ載るるが如し

○瑞巖寺 青龍山瑞巖圓福寺と稱も山城花園妙心
寺の末流みて臨濟宗有り古ハ松嶋寺ともいひき淳和
天皇天長五年戊申慈覺大師の創建あり一説ハ仁明
天皇承和五年もめて此寺を建てたるともいひその頃ハ

青龍山延福寺と稱して天台宗ありきと其後最明寺時頼
この處より來り法身上人と約して天台を改めて禪宗やし
法身を開祖として松嶋山圓福寺と稱しぬそれより大覺
覺雄智覺覺滿明極あどいつ唐僧來りて住し九十一
世義山和尚より至りて鎌倉建長寺派となり九十二世
實道宗中和尚より妙心寺派とあまり慶長十年伊達
政宗卿紀州の良匠刑部左衛門國次といふものを召し
て再び造營せしめられその十四年ニ落成したり輪奐
壯麗其美を盡し蔚として東奥禪刹の冠たり政宗卿親
ら五鬢松一株を殿前より栽忍松島の松の齡も此寺の

旭日嶋 あさひ しま

寛政 〇 〇 〇



旭日嶋或い朝日又朝陽は作る去の嶋むらう
梅樹數百株あり故は梅浦と名つく僧靈巖が
撰せし八景の一あり後悉く枯きうりとひふ

末榮えなん年ハぬるともや詠まれ僧海晏を請して住持と
 一永く伊達氏の廟所とせしむ佛殿豎二十一間横十二間
 一何り正面より胡銅の正觀音を安す天竺より渡來せるものふ
 一て松嶋寺開基の時より本尊とせしむ一説より傍空海の作ふ
 一りと云寛永十三年少將忠宗君先君の遺命よりて雲
 居和尚を請じて中興崗山とてたまへり又政宗卿甲冑の像
 を安置しその側は殉死二十人の靈牌を列きその後また忠
 宗君より殉死せし輩十七人の靈牌を列す其室は奥の
 間上段中段孔雀の間文王の間菊の間櫻の間墨繪の間
 鷹の間等より構子格天井欄間の彫刻玄關等まで

仙臺黃門政宗公像

松島瑞巖寺安置



末榮えん年ハぬるともや詠まれ僧海晏を請いて住持と
 一永く伊達氏の廟所とせしむれば佛殿豎二十一間横十二間
 向正面より胡銅の正観音を安す天竺より渡来せしものふ
 て松嶋寺開基の時より本尊とせしむ一説より傳空海の作ふ
 りと云寛永十三年少将忠宗君先君の遺命よりて雲
 居和尚を請じて中興閑山とすたまへり又政宗卿甲冑の像
 を安置しその側は殉死二十人の靈牌を列せしむ後また忠
 宗君より殉死せし輩十七人の靈牌を列す其室は奥の
 間上段中段孔雀の間文王の間菊の間櫻の間墨繪の間
 鷹の間等より構子格天井欄間の彫刻玄關等まで

仙臺黃門政宗公像

松島瑞巖寺安置



ふ諸國の名匠の作なり大障子小障子等の画も名なき
画工の筆ふして巧妙を極め精微を盡せり又奥間ハ上々
段と稱して政宗卿といふども嘗て入られし事を爾來人の
入るものありしハ明治九年車駕東北を巡幸しせら
れ瑞巖寺を行在所となしたまひし時この上々段を御座
所とせられたり住職少教正真壁太陽碑を建て
たの事を記せり

瑞巖圓福禪寺碑

明治九年六月。車駕巡幸東北。駐驛松嶋瑞巖圓福
寺。右大臣岩倉具視。召住僧真壁太陽。問其縁起沿革。

對曰。按舊記。此寺舊稱松島寺。承和中天。名宗僧慈覺所創。歷四百餘年。鎌倉執權北條時賴。逐名徒。使禪僧法身住持。更名圓福禪寺。為臨濟開祖。又三百年。仙臺藩主伊達政宗。拓其境而改造之。冒以瑞巖二字。及藩廢寺。亦隨衰。今至尊降臨前古所未有。梵宇從此興矣。右大臣具奏之。既而車駕還東京。賜內庫金一千圓。以為修葺資。縣令松平正直又承順聖意。以督工事。於是管內士民爭施淨財。寺觀復新矣。太陽以松嶋稚松數十本。送獻東京。併上詩一首。以謝恩。復賜帛一匹。太陽深感寵恩。欲勒之石。以垂永遠。以孫七郎當

時。扈駕親見其事。寄書請文。夫承和迄今千有餘季。其間郡國治亂興亡之迹。相踵於史冊。而求當時豪傑餘業遺址。無復存者。獨此寺雖時有盛衰。靈境具在。法燈永輝。居然為舊物。況地處名區。勝擅海內。聖情眷注。良有以也。然非上德聖明。理化超古。安能見恩澤及物之如此哉。吾聞政宗之改造此寺。特飾一室。極其華麗。人不知其故。遂莫敢居者。至是奉以為御座。嗚呼。政宗之舉。若逆知有今日者。何其奇也。然則此寺邀聖眷。非偶然也。明治十五年十一月。右大臣從一位大勲位岩倉具視。篆額宮內大輔從四位勲二等杉孫

七郎撰。内閣大書記官從五位勳五等金井之恭書。

○火鈴こりん 翁面おきな 寺中てらなか 小藏せうざう 寺中てらなか 小藏せうざう 蔵くら 蔵くら 什物しつぶつ あり 火鈴こりん 八高はつかう 八寸徑

五寸半形ハ鐘の如くふし中なかに 舌した あり昔覺満むかしあきみつ 禪師ぜんじ の時法しほふ を修しゆ して唐土たうど 徑山寺けいざんじ の火災かさい を救すく されたり一いつ うむその謝禮せらい やして贈來くわんらい まるものなりといふ毎年まいねん 正月しょうげつ 元日げんじつ の曉あけぼの 子こ 塔頭たかづち の僧そう 一人ひとり こゝと頸くび 子こ をけて兩手りやうて もてうり鳴りして松嶋まつかじま の村中むらなか と巡行じゆんぎやう す火災かさい を禳たはら ふ咒法じゆふほふ ありといふ其音清響そのねきやう ふして數十町すうじゆうちやう の外そと までも聞ゆといふ先年せんねん 誤りて井中いぢゆう 小落せうらく したることありやて釁隙せんげき あり翁面おきな ハ春日かすひ の作しやく ありと云傳つた ふ頭かぶ ハ口の腋わき みて糸いと みてつふぎ合せたり松嶋寺まつかじまじ 天台てんたい

宗そう として五大堂ごだいだう 子こ 舞臺まゐだい ありし時とき までこれを用もち ゐるといふされバ六七百年はちやくしちひゃくねん より前の物もの あり又また 翁島おきな といふも此面このめん の不思議ふしぎ ひとりて名づけりなりやといふ右みぎ の外そと 小佛舍利せつがら ありまゝ鎌倉かまくら 二位に の厄やく の見佛けんぶつ 上人じゆんじん 子こ 贈りたる書簡しよかん あり又また 寺中てらなか 厨くりやう の竈かまど の邊あた 子こ 火ひ の用心うしん といふ語ことば を彫う たる板榜いたぼう あり秋葉あきば 三尺坊さんしやくぼう の筆蹟ひつせき ありとて近ちか き頃ころ 先住せんじゆ の和尚おそう の時とき 子こ これをのけたり其字體そのじたい さまぐにうゝひとりて尋常じんじやう ありば見ゆ故ゆゑ 世よ の人ひと こゝとを賞美しょうび すといふ○朝鮮梅ちやうせんばい 又また 八房はちぼう の梅うめ といふ政宗せいそう 卿きやう 征韓せいがん の役やく の歸路きりぢ 子こ 齋さい したまひ種たね あり瑞巖寺ずいがんじ の庭上ていじやう 子こ 一いつ を紅

一ハ白ありその花重瓣ふして中央ある葉の外より葩の
 間ごぞふ又少しづの葉何りて香氣も殊りもぐれたり實
 ハ三ツ四ツ又ハ五ツ六ツも何ド葉よつきて生ず尋常の梅子
 とりハ小し老幹鱗皴瘦枝樛曲ふして年経るふ從ひて
 實と結ぶこと少なくあるとつり世りある品字梅鴛鴦
 梅の種類あるなりといふ人あるも此花と全く同じくは
 范石湖が梅譜又陳扶搖が秘傳花鏡にも載せざるもの
 といふ實ふ奇種といふべし當時卿の詩何り曰く絶海行軍
 歸國日鐵衣袖裏裹芳芽風流千古餘清操幾歲閑
 看異域花この真蹟舊熊本細川侯の家よ蔵せりといふ

又芳芽を裹きたるものハ竹く河きたる籠りて維新の
 初めまで舊幕臣松平友三郎氏珍花せりとついで今
 ハ如何ありしや

○法身窟 まゝ無相窟ともいふ瑞巖寺門の左よあり巖
 を穿てること 豎四間二尺横四間一尺五寸とて數十人と坐
 せしむる最明寺時頼この窟よ宿して法身上人や改
 宗の事約せりといふ其後七八十年過て嵯峨天龍寺
 夢窓國師行脚して暫く此處よ在りたりてまゝ夢窓窟
 ともいひり中ふ碑何り題して最明寺副元帥平時頼道崇
 居士弘長三年癸亥十一月二十二日と何りその側よ豊聰

王の像を安置をまゝと雲居禪師行状の碑有り窟の上に法身無相窟の五字の額ありこの外に經堂千佛閣大光庵光明藏等あり

○瀟浦 瑞巖寺の門内左右の地を稱す舊名瀟湘浦といふ七浦の一あり

○陽徳院天麟院圓通院共に伊達氏の靈廟あり陽徳院に政宗卿の夫人田村氏の廟あり天麟院に卿の長女越後少將忠輝の夫人圓通院に卿の長孫從四位光宗君の廟あり何れも結構美麗なりて銅瓦金椽煥然として照映せしの維新後に頗る荒破り及びなり

石斛 せきこく

松嶋名産の一あり
南山師曰諸嶋多生
之以棕皮包根以代
掛蘭雅澹可愛也
の外小岩長生雨漏
草城垣草等と産す



雲水

○獨鈷泉 陽徳院の後より昔慈覺大師開山の口水より乏
りうり偶獨鈷をもて土を穿ちしに清泉湧出でたりといふ
其水甘冽ゆて最も茶に宜し大旱ふも涸る事なく松島の
水此を品して第一とい

○瓊浦 今の天麟院の地是あり七浦の一なり昔胡桃樹あ
り故ふまゝと胡桃浦ともいふ

○檐端梅 圓通院の側ふあり所謂松嶋香蓮の故事あり
は是あり佐々木知芳氏香蓮尼の傳あり又真葛女史和文
の傳り天保中先師保田翁の石文あり左に之を載せ
名も貴い敷紅蓮尼は出羽國象瀉の商人の子あり父三十

餘三所の觀世音を拜奉むとして獨旅立ちし陸奥松島の掃
部と云る者も同敷志とて獨の旅ありゆくりなく道の伴
ひと成り懇々語ひ睦ひつやうのくまも程小志遂て白
河の關を別むとして互に名残惜みけり時を思ふえず
斯親を馴ぬるを今遠く別あはれ又逢事も知難し君一人
の男子もたりとまき我一人の娘もたり願くはこを配せ
て永く好みを結む事とといふ掃部悦諾ひて叔我家小
歸ハ其子小太郎煩ひてもの無成ぬとて人々悲し合ふに
夢現共え辨は先たぬ心の闇より迷ひて日を辱つ
象瀉より未斯と告ざるを幾程もなく女を送りおこせり

たり掃部驚我子早くみまう侍まさる疾告ざり怠
 い今もといふせむまのちも縁と思ひ疾歸て更子好男
 と見給へといふ女痛く驚打泣つとみりえ物も云を親
 々の許あの中へ未對面もえ賜らぬりうせ給ぬ共猶妹背
 ところ思侍れ宿世拙きいといりせむ今もりの唯亡靈よ
 事まうり命終るまで他一心を思ひ侍らざるといふ勸
 むれども聴む遂ふ止居て舅姑も孝を盡し實々敷事
 世ふ類ふ斯つ歳を経て舅姑も無成よけきハ圓福
 寺の明極禪師の弟子と成頭とおろて名を紅蓮と改
 め一向は法の行耳して其世を終け先よ小太郎幼き

時常ふ觀世音の御堂の邊うて遊戯つ手つら梅一本
 をちん植置たりしそを此尼の亡つまの形見と見つ忍ひ
 其側よ庵して住けり或時其花の盛成を見て悲こり
 堪を 植置し花の主いそ無ふ軒端の梅咲き共何
 きと讀けるふ又の年の春此梅のち花咲け尼又 さけり
 を今い主とありむ屋し軒端の梅の有む限は是より春ご
 とに元の如く花咲けりとあむ今心月庵といひ軒端の
 梅と云るが猶當時のを作繼植繼たも也又其手すさみ
 み作りしせむべいと云物後り其名をおあせてあられむ
 といひ今もまねびて人こもてちやし圓福寺より歳ごと

又國の守ふ獻る事恒の例といふれり然あまとも今ハ其
 うせし年月も其墓の在りも定るを以て世愈遠く隔
 りあハ語嗣聞嗣く事もうせあむ事を憂て江戸の宮下信
 教圓福寺の中方禪師ヲ計り石ニ記して永く世ニ傳へ
 む事を願ハあま感たの志也穴悦ほりのわざ也 逢も見
 以世ニ亡靈を妹背と思て花蓮身の盛人老りけるうあ
 惜らき蓮の花ハ散り物ら類なき其香ハあせり萬
 世迄ふ天保十四年三月保田光則誌

○阿彌陀山 千佛閣の後より南ニ走ること百餘歩ふり
 て洲寄巷ニ至るまでの山を以て左右廣と纒ニ十餘歩と

ふ懸崖ふりて崖壁ハ洞穴多く佛像梵文を鑿りより山
 上ハ古松四株あり土人呼て勅賜松と以て中ふも北隅の一株
 ハ一根兩幹ありて蚪枝四出り杖杆蟠屈り龍蛇の攫拏す
 るが如く松嶋中古松の賞を冠きもの固より多けれど此松
 と以てその第一とす南數歩ふりて古碑あり高五尺餘横
 三尺むより苔蘚昏蝕したる弘安五年等の文稍辨むべし
 相傳へて旭日の墓碑と以て旭日ハ何人ありや詳あらず

○觀瀾亭 瑞巖寺の南觀月崎ニあり舊名龜首崎と
 以て風色尤も美よりて八景の一あり巖壁ニ跨りて構造せり
 昔政宗卿こふ渚宮と建てらるるが慶安四年延燒よか

今の亭は豊太閤伏見の行殿より文禄二年卿は賜は
 りし江戸の藩邸へ移し置られたる忠宗君に至り
 て今も移されしを柱の四方を木むぎの四方を木なり或は唐木な
 りとも外圍の垣は細竹を網代に組ませり其組を
 を四ツ打十二のけとつひと貝玉垣ひんぎまがきと名づくその状尋
 常よりいまり是亦伏見より移せられたる貝玉垣やハ
 玉垣より代ふる意あれば替玉垣と書くなりといふ説もあ
 りさて亭上は扁額二個を掲ぐ一は觀瀾亭の三字少く佐
 々木文山の筆あり一は雨奇晴好の四字を政宗卿五世
 の孫中將吉村君の筆なり是は宋の蘇軾が西湖の詩

水光瀲灩晴方好山色空濛雨亦奇若把西湖比西子

淡粧濃抹總相宜

按方一作偏空濛作濛濛子
作施總作兩或也今從本集

とありて西湖

の勝槩は唐山よりありて天下第一と唱へ松嶋の風景も日本
 よりありて第一と稱せられたる西湖の秀句をとりて此亭
 は名づけたまひし事面白し維新前までハ司亭吏と
 置き平生は雨覆とらけ常人の遊覧を許さば代々厚く
 保護せられたる廢藩置縣の日より官有となれり舊藩
 主伊達宗基君其終は朽壤ふ至らんことを惜まれ今
 茲明治二十年官は請ひ再び伊達氏の有とあきり

○菅屋汀

觀月崎の南より藤原俊成の歌をしゆ

の筈や浪子ありすおとよみし此所ありとぞ或い波荒
灣あしやのともひひ又い蘆屋渚ともひふ

○梅浦 筈屋汀の西より昔旭日鳴は梅樹數百あ
りて梅の浦と稱せし後こころぐく枯まけきべ鵬雲和
尚これを惜み別よちくに植てまゝ梅浦と稱せり春初
ごとに香霧霏々として遠く望めば恰も残雪の枝頭
在るが如くみてまゝ一奇觀あり

○一華庵 梅浦より雲卧と稱し雲居禪師の建て
し所あり後慈光院と改め僧會通ありふ住めり會
通は田中氏なり忠宗君は仕へしが罪ありて逃れて僧
や

あり後君卒せらるると聞き自裁して殉せりとひふ

○霞浦 或い栖霞潭は作ら梅浦の南より七浦の一ふ
り

○竹浦 梅浦の西南より或い幽篁浦とひふ幽闐の地な
り寺あり法性院とひふ

○象鼻巖 法性院の門の南側にあり形の似たるを以
て名づく

○青春磯 象鼻巖の南より一ふ童子崎とひふ昔一宮
千代とひふものあり自らその容貌の美あふを愛し往來
經過する毎にこの磯上り立ちて水は照し時を移して

去りし處ありといふ

○小松崎 青春磯の南にあり竹浦より此に至るまで

右の峭壁左の曲灣ふして巖路屈曲せること愛す處し崎
盡くまば渡月橋あり

○渡月橋 小松崎より雄島より渉る橋なり長十餘間

狭くして溪深く俯して瞰れば目も眩せんとす相傳ふ見佛
上人雄島は修道するにや十二年の間一度も此橋を過ぎ

ざりきと

○雄嶋 頼賢碑は御島とあり歌枕は小嶋まゝ千松嶋

小作まり今ハ名所集小從ふ日本武尊東夷征伐の時この

嶋は休息したまひしより御島と唱ふと云ふ一説より見佛上人

此地に住みて法力深きことを鳥羽天皇の聞しめし佛像器物

を賜りしより御嶋と唱ふとされども是より前の古き歌

は松嶋やをいふとみたるも何れも名は古き事なり此嶋

右より嶺上千株の松あり左の屏風嶋よりて陰を落し翠

を涵し長橋を過ぎて幽徑に入り苔蘚露深く巖崖路を

めらるる幽沈寂寞として來客希ふ松聲寒く此嶋より登る

者ハ必む悽愴悲哀の情を動かし元亨釋書小釋見佛居

奥州松島其地東溟之濱小嶼千百數曲洲環浦奇峰異

石天下之絶境也其尤者曰千松嶋佛結茆而居精勵

苦練一十二年。其間誦法華滿六万部とあり○松吟庵
 嶋中藥師堂の側にあり寧一山の碑文有り妙覺庵の舊址
 ありて見佛上人頼賢和尚などの居りし處なり○見佛堂
 里人ありと奥の院とよぶ見佛上人法華讀誦せし道場な
 り○坐禅堂 寛永中雲居禅師これを建てし把不住軒
 四字の額あり○頼賢碑 坐禅堂の南より世の人はと雄
 嶋の碑といふ高さ一丈二幅三尺六寸五分より四尺三寸までふ
 て厚さ七寸より徳治三年丁未の春觀鏡坊頼賢といふ僧
 の弟子匡心孤運等其師の徳行を傳へんとて建てたるも
 のなり文は見る小足らざれども唐僧より鎌倉建長寺より

住せる一山一寧の文并よ書あり草體を雜へて見事なる
 書あり萩生徂徠曾て評して子昂哉風流可掬と稱せり
 徳治三年より明治二十年まで五百八十年あり古碑あり
 といふ處し碑の側より五輪の塔の高さ一丈餘あり骨
 塔といふ圓滿國師を建てしこれを建て洞水和尚再建せり
 といふ其下は深き壙あり人々死者の毛髮齒骨などを納む
 此嶋の前後左右の巖面より窳堵婆といふ佛号法謚等を彫
 て立てたるものその數をたゞば櫻田欽齋翁曰四方の遊
 客といふ是を見しことを厭ひて啻は口ふ罵るのみありば
 筆よのせて誅とせり傳ふ予おそく此地幽邃閑寂なり

して海山の靈氣を鍾めたるが故にうに來るものゝ如くは
 悽愴として感と發し或い古と志のび今をいたし又い父母
 祖先と慕ひ亡妻殤子をうふむ貴賤賢愚とふく情あ
 るものいふ志あり其感情の動くを隨ひて昔と追ひ本
 り報ゆる心あるより此等の營をあすこと愚民は有りて
 何やとすするにたゞ佛敎を浸淫して毎益の所為を
 すこと天下滔々としていふ志ありたゞ此地の此事のとな
 げと

○屏風島 びやうぶしま 雄嶋の北竹浦の前は有り島の四邊峭壁
 して翠松偃蹇として上より垂れ宛然として一の畫屏

風をり

○朱鳥山 あけとりやま 雄嶋の西南より又まきりて姉取山ともいふ
 此山の南より鷲峯あり突起して地中より湧出づるが如く山
 上の眺瞻頗る奇絶あり相傳ふ古へ神僧有りこの山を見て
 驚て曰中天竺の靈鷲小嶺何の年より飛び來ると依て名
 づくといふ

○雁音山 かりねやま まゝ落雁峯とも書す朱鳥山の南はあり雁の
 翔りて後集まるに似たり山勢走りて海に入る處恰も雁の
 首を伸して水汀は飲啄する状あり故に雁崎と名づくま
 腕が崎ともいふ其さは人の腕とも似ればなり

○櫻岡 雁音山の西よりあり渡月橋より西へ入り石徑幽窅よりて高下屈曲せしむる十二町あり其地南へ落雁峯北へ巨石嶺西へ鷲峰南へ熊耳峰より其中小農家兩三ありて水園數十頃幽邃蕭寂として人の至ること罕あり偶至る者何まば出づる處を辨むる能はざるが如く實より一小桃源あり土人曰此地左右櫻樹多く花時雲の如し因て名づくると五葉庵あり

○大澤 一は扇溪より作り聞老誌より鷗沙灣小作れり落雁峯より續きて瑞巖寺より一里餘りあり塩松環海中五山の一あり松嶋より陸路へ嶮岨なれば舟行するを善しとい

磴道數十級よりて頂上に至る西北へ蔽われ南東へ開け峽勢左右に分れ海波を其間より觀むれば嶋嶼點綴してさあざり扇面の画の如し其眺望富山よりおとらび富山の島嶼城遠くながめ此處へ近く見る別より一景の勝地なり寛文中鵬雲和尚海無量寺を建てたり昔雲居の松嶋よりありし時此地の幽邃なるを愛して小庵を結び雲卧と名づけたり萬治中僧洞水重ねてこれを修め更より慈光院と名づけぬ元禄中藩主中將網村君鵬雲より命じ此庵を梅浦より徙して此寺を建てしめ扁額を賜ひて海無量とせしめぬ寺中より瑪瑙より作りたる羅漢の小像數多あり一つ毎よりさまざまの姿して

其工甚だ精妙なり昔唐山より舶載したるを鵬雲長崎にて得たりしものなりと云ふまゝ千手大悲像を蔵す像を東福門院皇太后旨ありて良工をして大小六千軀を造らしめらまゝ我が天麟夫人其奇異あると聞われて左大臣近衛公より邀請せらまゝ公奏請して賜ひしものなりと云惜哉維新前この寺烏有と云まゝなり

○鈴浦 扇溪の東麓より故より土人呼びて扇溪灣といふ扇溪より登るものこれよりして峽間數百歩あり人語屐聲山と相應ふるこや鈴聲より似たりこの南より梅崎より昔し崎上は梅樹數株ありて崎の南を觀梅浦といひ凡そ松

嶋の地はまべて翠松一色あるに此崎特より梅花ありて遊客舟を維きて賞翫せりやをりさるふ今ハ梅皆枯きて只其名を存せるのみ誠と惜むる也

○峨巖崎 鈴浦の南なる崎の上よりあり崎腹懸崖よりして洞穴より木葉石と出す好事の者梯してこれとやるといふ

○筆架浦 峨巖崎の西よりあり扇溪よりして塩浦に至るに兩路あり一ハ西嶺より大平嶺を経て芳津より出づ一ハ此浦より濱田須濱等を歴て芳津より出づこれと便道といふ松島の地諸嶋諸山松茸を生ずまゝとも此間の稠きふ及ばむ維新前までハ瑞巖寺より毎歳これを藩主より獻せり故より一農と

してこれを守らめたりこの浦の右は馬脊崎うまのせ 榎樹崎えのきざきあり
 まる西は濱田ありこの間の大灣とある左は三崎あり右は赤あか
 崎あり漁農十餘戸水田數十頃あり是を松嶋塩浦兩村分界
 の地といふ松島西南の勝概略こゝに止るこれより以下松島東
 北の勝を擧ぐ

○天童庵 瑞巖寺の東北より本尊は十一面觀音あり木
 佛立像あり長一尺あり春日の作ふて陽徳夫人の護持あり
 きやいふこの境内は宮千代の塚といふあり高二尺餘あり
 むろし此をとりて宮千代といふ童子ありき容貌婉孌才
 性敏慧ふして兒戲を好まず葷羶を食むは好みて和歌と

賦しぬ見佛上人は從ひ法華經と讀誦をもふ其聲劉亮
 よし人々奇異の思ひとなり時の人天童と呼べり上人寂
 して後童子もまると尋で死せりとといふあるふ種々の説あ
 るども怪異より渉まば略す

○松嶋橋 天童庵より五大堂へ行く處より二ツの橋あ
 り或は洗橋といひ又渡江橋といふ民部卿忠教の歌は藤
 咲より松嶋のまゝやいはい是なり但し今ハ藤おけきど
 も長赤水の紀行よままに寶曆の頃までいありきと見ゆ
 一説は松島橋は雄嶋の渡月橋と指まやもといふ一橋は
 長さ三間一橋は六間あり何まも幅は六尺ほどありて皆

梯子の如く間とをわけてからうけて足のうらむる處まで
なり其下の數仞の深さふけて満潮の時の漫々として碧水
湛ふるのゆるりこれと渡るもの目眩き足慄きてあたり
あぬるものなり

○八幡祠 二橋の間あり昔ハ八幡崎やちばんざきといふ處ありし
を寛永十七年十一月此處より移されたりといひり前より出
せり舒明天皇八幡勅使の即ち此祠ありて千年以上の
古社なり

○五大堂 二橋を過れば五大堂ありて五大尊像を安置
す大同二年坂上田村麻呂東夷征伐の時の建立なり

り慶長五年政宗卿修營せられたり鰐口より乾元元年正
月十一日草壁入道勸進五郎爲武運長久寄附之といひり
大同二年より明治二十年まで一千八十一年乾元元年より
五百八十六年なり一説より田村麻呂の時毘沙門をたす安
置し五大尊ハ慈覺大師の時よ至りてこれをおけるありとい
ふ○嶋を出でて少く北より從前御船藏かまづらと稱せし處あり藩
主の樓船孔雀丸鳳凰丸大鷹丸小鷹丸等數艘ありて其前
と水主町といひて四十二軒あり皆扶持米を賜りて是を守
り時々乗船の練習ありその棹歌數十章あり古雅ありて聽
く處く其長ハ大番士ありきこれより東より崎あり通舸崎つらさき

と云ふ松嶋八崎の一あり一より津崎或ハ鶴崎とも云ふ南ハ
 福浦繪數嶋は對し西北ハ長灣ふして光徳浦嘉多浦や
 あり灣と隔て愛宕桔梗金比羅大六紫雲山等を望み東
 ハ高城川の海口崎脚を繞る實ハ奇勝あり然れども荆棘剪
 らず土人こそを賞むるを知らばまことハ惜むべし松嶋より
 高城へ行く道傍の巖盡る處と龍首崎と云ふ昔ハ松島明
 神と云ふゆりきと云ふ後高城驛の西ハ移し紫明神と號
 せしゆり後ハとと梨木明神と云ふり

○經嶋 觀瀾亭より東六町餘の沖ハある嶋あり其中ハ經
 塚と云ふゆり高一尺五寸周八尺松嶋寺改宗の時天台の經

文と集めて云ふ此處よく焼きて、塚と築けりと云ふ五重
 塔あり高一丈二尺五寸享保年中天嶺和尚の建てたるあり

○福浦嶋 經嶋より一町餘より此嶋ふ竹多し挿花筒
 ふ作りて水久しく乾かず好事の人茶抄尺八如意等作り
 り又一種堅實ふして中心のなきものあり 實竹と云ふ印材
 り宜しき其枝をもて箸と作る此處の名産あり松の名
 あり嶋々の中ふ修竹萬竿渭川の富あり福浦の名もむ
 りと云ふ嶋々○毒龍庵 洞水和尚の関基あり本尊の不
 動ハ智證大師の作りし辨慶の所持せしものと云ふ又辨
 慶の笈と云ふものゆり高三尺横一尺八寸あり四面ハ佛像

及び雲紋を彫りて中ふ一架あり架上より天女及び十六童子の像を安置す像各三寸許製造巧妙ふしむのふも近代の物より何れも側より碑あり享保中天嶺和尚が建てしものありやいふ庵の前ふ坐禅石あり洞水和尚この地の幽邃を愛して常ふ來りて跣坐せし跡ありといふ又硯石といふがありて長一尺七寸横一尺一寸あり洞水和尚が手習石といひ傳ふ今あるものなきなり又調伏壇といふあり時頼入道松島寺改宗の時天台の僧徒よりふ聚りて時頼を調伏せりといふ今小熊野神を祭まじり

○徳浦嶋 経島より二町餘まで福浦嶋の東より舊名戸

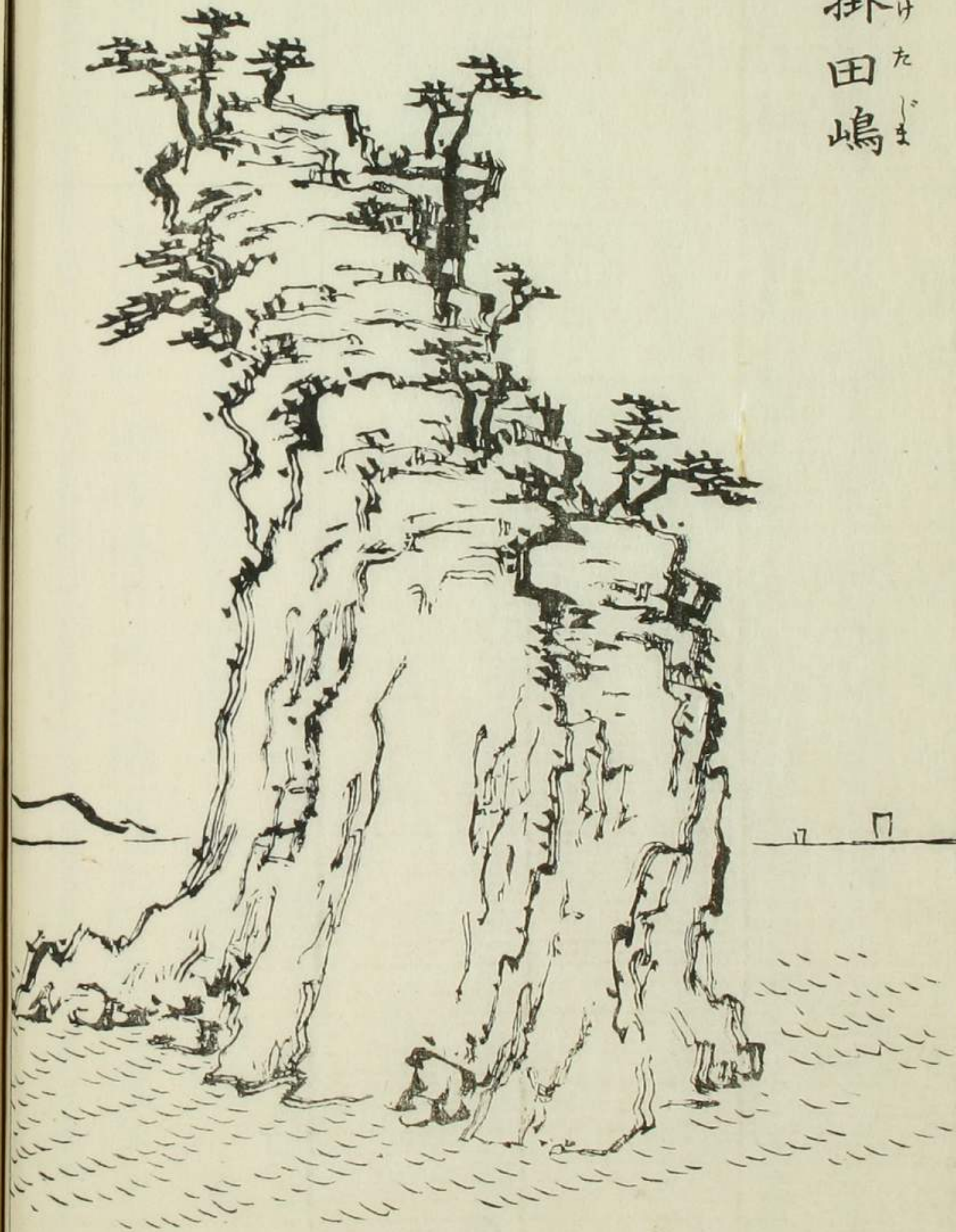
倉又解羅といひしと後ふ今の名を改めて福浦を對せしめたりといふ是より數十間を隔て 仙冠嶋 又千 千 部島 引通嶋 焼島 旭日島 雀嶋 繪島 青柳島 瀬島等あり

○九野嶋 瀬嶋を隔つること十数間あり一は九子嶋小作らるる松島左を嶋嶼中尤も大方なるものあり島形九裂して梧葉の如しこの嶋四望共ふ奇よりて東北面を尤も奇ありとす數十里の外は白練洲大洋を横絶して金華の山其上は秀抜し縹渺雲際より接す四傍數小島あり 雪嶋 藤島 麻衣嶋 湯島 笹石島 渚島等

和亭



掛田嶋



なりまゝ三十間を隔て 羅漢嶋 まゝ二十五間を隔て
鳥羽嶋あり或ハ宮嶋ともいふ

○翁島 鳥羽嶋を距ること四町餘たうき高城川より舟行
て松島より至る衝つは當る高城ハ松嶋より陸路半里りの驛
ふして仙臺より石巻いづまに至る道なり松島より富山とみに至るもまゝ去
、或過ぐ

○鷺嶋 翁島より六町より磯崎いそざきの前まへあり磯崎或ハ石磯
まゝ磯崎より作り漁農五六十戸より西北ハ山より東南を海
に面し高城は鄰りて運輸は便あり西ハ塩場あり廣斥ひろしより
鳴瀬浦なるせうらといふ南ハ通舸崎つうがさきは對まこの嶋より十町を隔て

て 鷓嶋 玉卮島 蛇嶋 博山島等あり

○白洲 蛇島の東二町より大小二嶋十數間を隔て 相
對ハ皆名を同うす此島松間ハ桃數十株ありて三四月の際ハ
ハ芳華鮮美落英繽紛とて潮ハ隨ひて沈浮ハ武陵桃
源の趣おもなり嶋小くして民家田畝あり然まども塩松
の環海ハ總て翠松一色あるに華を以て奇を呈するを梅
浦と云ふとのこなり

○月嶋 白洲を距ること五町よりあり彎形をまして初月
の如くまゝ十餘間を隔て 星嶋あり小くして圓形あり
甚ど高うざれども四邊皆削壁の如く梯せざれば躋る

登るべまて二町餘を松賀島あり富山の下よあた
 ○富山とみやま 一ふ富宥山より作る松島より東北陸路二里ふて
 手樽村の内より塩松五山の一あり山麓は農家八九あり
 山下より巔に至る小磴道數百級ふして喬杉老檜森鬱
 として晝とつどもほのぐらし半腹は大仰寺ありその院
 中より眺望をれば松嶋の海面庭上の泉水の如く浮める
 島々目下はまちくて松の緑は手は摘むべく其風景詞のた
 よふ登きふあらず遠近の眺望は東南遙ふ大海の天と一
 色あるをめぐめ遠き右よ相馬の諸山より近き東灘の二ツ
 森まで數百里の程打つき左よ遠きは金華山ちのき日ひ和

山やま石いし 卷ふつてさきで皆足をらげて踏むとちもたる又漁舟
 の行ふい落葉の流るる如く塩屋のけぐりの風ふあびき
 て雲と共にたふびくさほひもんうとあし古より松島の風
 景は富山はありといつてもむとあるう柳まて天氣澄朗ふ
 て夕日虞淵は通る時塩浦璵崎の間千里の外より一點の青
 色烟の如くあるを見ることいはい是をふをち富嶽ありと
 つふ巔は大悲閣あり大同中田村將軍の建立して奥州三
 觀音の一とつふ牧山麓 側は將軍の馬上戎裝の像あり俚俗
 の説は將軍大竹丸とつふ鬼を退治し此處より埋めて堂と
 たてつりとつふ舟山萬年曰富山の勝阪將軍の後千有餘

年の間得て稱することありきその世は顯をれし二百年
前はあり故に古籍に載する所あり播紳の詠言に
及ぶるものあり何ぞ其寥々たるや遊人松島は明らふして
富山は昧けきバ譬へバ猶瑤池は觴して王母ふ賓せざる
如しや

○大塚濱 おほつづみ 富山より三十町餘よりして呼子崎長山崎の東
北より地形は後山前海ふして山勢蜿蜒起伏して餘景
濱の北に至りて盡く漁農百戸あり或いは曰く地名もと王塚
濱は古へ天子の塚墓ありきと古塚二十餘あり或は妃
嬪の墓と稱するも何れ或は皇子の墓或は左右臣僚の墓

と稱するものも何れま鏡神社ありて古鏡を祭る舟萬
年曰相傳へて古天子の御物とす其鏡圓形ふして亘り尺
許兩環あり面は二像を鑄つけたり冕して坐するものや
帽して后妃の如きものとあり余嘗て房州小湊妙蓮寺
に蔵せる僧日蓮が自ら其考妣の像を画けると見たるに
全く此鏡面と同じ因て憶ふは當時の習俗よて考妣の
像を作するもの多くいかくの如くありしやんされをこ
れも古昔貴人などの世亂れ家破きて僻地より潜匿せし
がわざふいはくはや側は道士の家あり化蔵院といふ古
文書及び刀劔等と蔵せしが數十年前災は罹りて一物

をも存せず考據せんは由なき惜むるべきとみこそ化蔵院の南山上より不動の石像の高さ五尺許あるは自然のものふて彫鑿せしにあらば此處東南に宮戸寒風澤等小對して眺瞻も佳ある所なり

○白練洲 一は曝練洲或は長洲は作る大塚濱より地勢南は走りて直は海上を横断すること三十餘町ある是あり廣さ百餘間其他は白砂よりして翠松羅列しその窮る處を圓山とす東灘とす大洋を隔絶するが故は洶濤西南ふ入らば塩松の環海波澄黛蓄淡冶相得るは此洲あるを以てあり古老曰く數十年前は洲上の松樹

甚だ密あらし白砂皎潔ふして數百丈の縞縑を曝すが如くありしは此名ありと磐溪先生曰く東灘之崎青松離々長沙如堤忽為一山以接海門松嶋北境奇觀也余嘗謂松嶋之勝集天下衆美而大成者今觀於東灘一隅丹之天橋何足道哉

○東灘 一は東那又唐那或は鬪灘は作る圓山の東より漁家塩屋一百戸をとり村をたす東南に宮戸を對し其中間を海口とふす塩松環海五口の一なり廣僅は二百餘歩ふして潮汐奔突して東より來り圓山の下小至りて威を斂む

○圓山 東灘の西より塩場を開くより又塩神山とも稱す突然として地中より拔起し山上四望共佳あり西南ハ塩松の環海を瞻望し東北ハ金華石港左右の諸山ハ對す然れども山甚だ高うざれば俯臨の勝はいつらずして別ふ一種の景色あり故は目して圓山平眺といふ古老の説は此山もと海中ハ孤立せしものをありが砂土堆積して漸く長洲をなす遂は陸に接するに至るわといふ

○不老山 餘景濱あり山足は竇穴多し波濤衝突して其中に入り灑て巖背に出づ一進一却雷の吼るが如く雪の濺ぐに似たり亦一奇觀あり崖壁上は自然に佛像を為さしもの幾許ありやあらば土人これを五百羅漢といふ其中嵌める處は三像あり最も大ありこゝを彌陀觀音勢至の三尊といふは彫鑿せざるが如し亦一奇あり

此山もと念佛壇と名づけぬ綱村君嘗て茲に遊び其勝を賞美し其名の雅をうらむを惡みて絶勝の地人をして老いぎうむるに足るとして今の名に更めたまへりとあり

○宮戸嶋 一は皇都島と宮渡嶋は作る東灘の南二町餘より西南ハ鳳鳴寒風澤に鄰る嶋嶼中最も大なるものありて周廻三里餘あり島上田圃多く半農半漁なるものあり

り西端と里濱とひ南と月濱とひ東北を大濱室濱とひ
ひちきを宮戸の四濱とひ

○大高峰 宮戸より或は大鷹峰と作る塩松環海五山の
ふして最も高しと以故に四望故然として嶋嶼の斷續起伏を

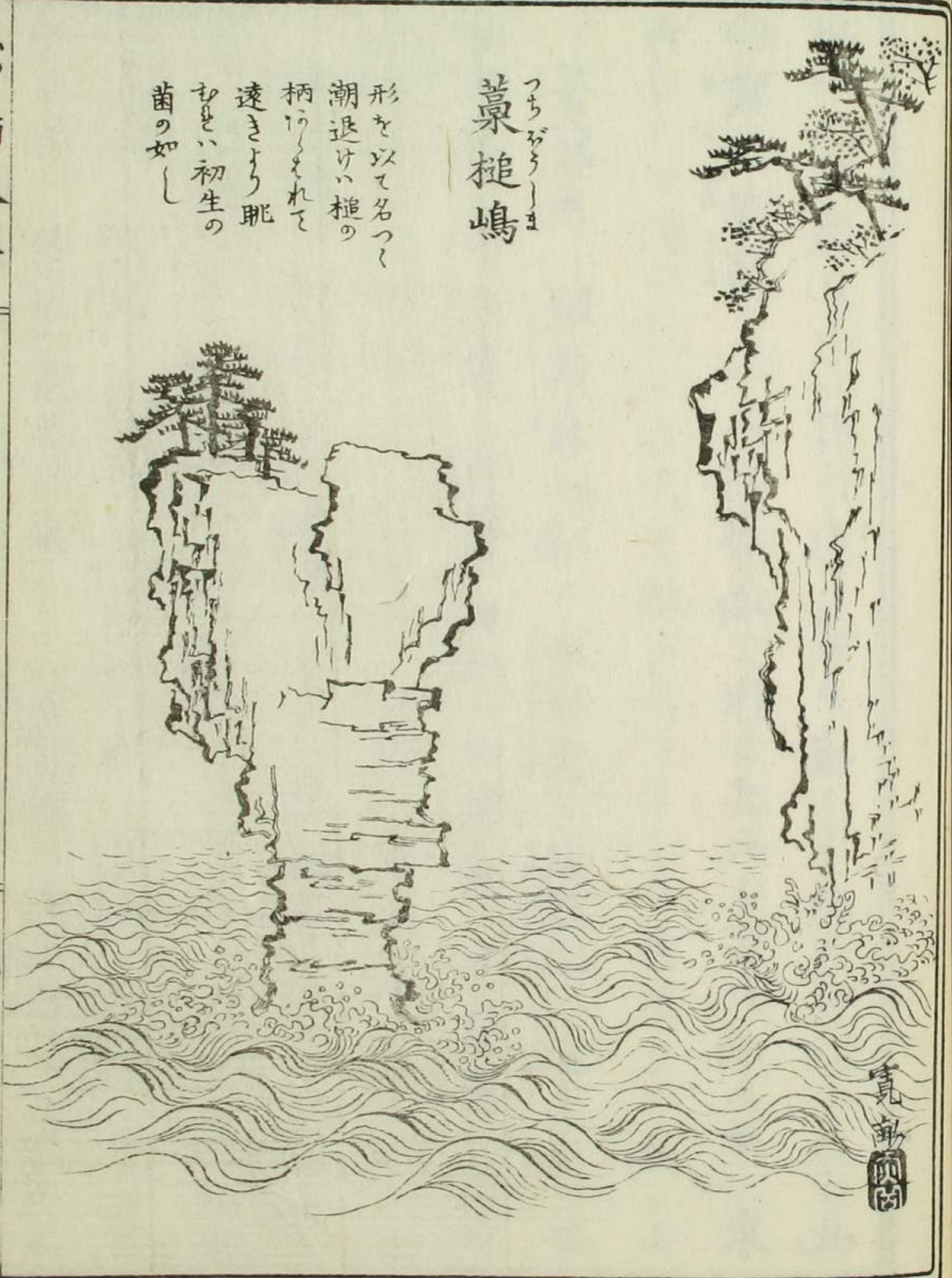
るもの一掌の中ふり舟山萬年これを目して大高の大觀
とひ其他 塩井 厨場 瑠璃峰 落月洞 垂水 龍崎 瀬

戸濱 鰐魚淵 午首 文蛤濱 川藻崎 波静浦 稻崎

掛月巖 觀音峯 火焰巖 筆樹崎 崑崙崎 潜浦 避

雨洞 雙松崎 疊石 鮫浦 讓善浦 箭括崎等の勝あり

○又宮戸嶋の前後嶋嶼數多り其奇形怪巖一々名狀し



藁槌嶋

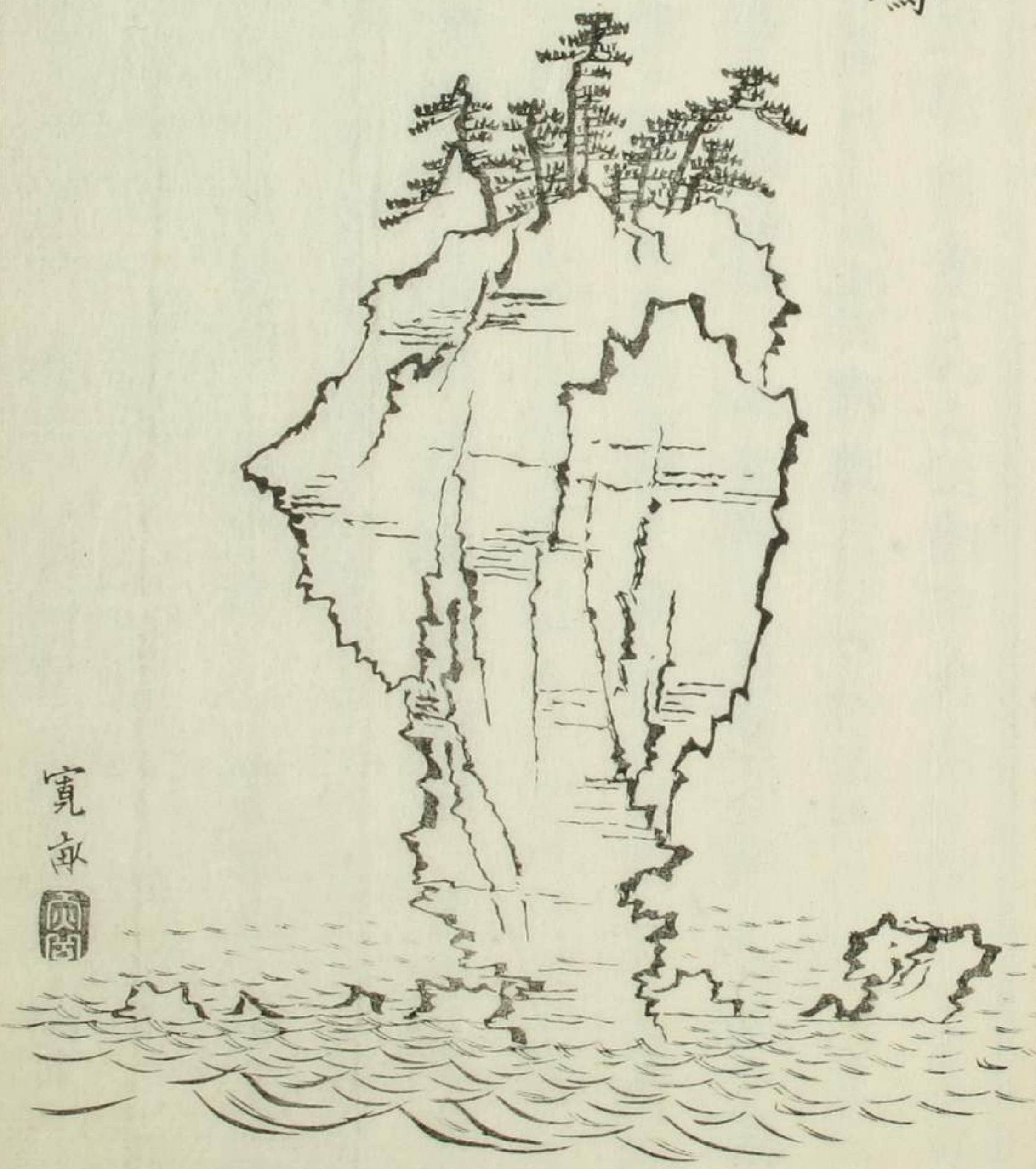
形を以て名つ
潮退けの槌の
柄ゆゑを以て
遠きより眺
むむ初生の
苗の如し

盡し難し今た其名を舉ぐ 皇都嶋 大鍋島 小鍋島
 屏風嶋 涯島 沖嶋 連層嶋 裂嶋 前島 芒草
 島 岸高島 洋高嶋 瞳哉嶋 中埜嶋 鷓鴣嶋 爵嶋
 大櫃嶋 紀島 烏鵲嶋 海鰓洲 横根島 波慣嶋
 大寧嶋 小寧嶋 比類寧嶋 羽島 育子嶋 繼子島
 無名島 卯花島 崎礁 里嶋 小鷹嶋 大鷹嶋 雷根
 蛋寢島 瞭哉島 二島 曲瓊島 戎服礁 松之嶋等
 〇寒風澤濱 一ノ寒澤嶋は作る其大さ宮戸嶋より西六町餘より北
 西十八町南北十二町有りて宮戸嶋より西六町餘より北

ハ鳳嶋は鄰り西ハ野々嶋に連り西南ハ桂嶋石濱に對す
 塩松環海五口の一ノ一ノ大船巨舟ハ此口より入るざれば入
 ることと得む故に居民百餘戸ありてその繁榮この右に出
 づるものなり但近來商船の繫泊荻の濱に轉じたるをもて
 甚だ寂寥を以てせり嶋中に 日和山 屏風崖 大平戸
 小平戸 雪卸崎 鹿崎その他神社佛寺あり其前後
 には嶋嶼ハ左の如し 曬網島 寄網島 前島 夜景
 嶋 冠軸島 三山嶋 青島 東涯島 二嶋 筒立
 島 二島
 〇鳳嶋 寒風澤と距ること二百餘歩より一ノ鳳羽

嶋ともいふ土人或い朴島よ作る周廻里許漁家二十餘戸
 けり觀蹟聞老誌よ曰鳳羽島の海岸より牡蠣を出す巨
 大ふして甘美あり尤も名産とす其前面よ碁布まきとい
 籠崎嶋二 道人礁 百川礁 暗礁の殊よ 大鯨嶋 小鯨嶋
 振鷺島 小人嶋 長頭嶋 道士浦 黄雀嶋 鳩嶋
 嶋左又圖を出す 笹嶋 螺石嶋等けり
 ○野々嶋 一よ納囊嶋よ作る鳳嶋の西三百間よあり寒風
 澤とい一海口と隔つるのふて大ききまもまこちまより亜ぐ
 居民二十餘戸嶋上水田多く税軽く徭簡ふして物力餘
 りけり利俗囂紛の煩ふ閑逸幽寂の地あり 明月洞

鳩嶋



寛政 四

夜神樂崎 正右洞 鷗浦 采藥崎 真鳥崎 擲瓦崎

不毛崎 湊戸浦あり其側 中鳥井嶋 鵜躰嶋 柏

樹嶋 小人嶋 登鷲嶋 掛田嶋 一は鷹巢嶋といふ巖

狀峻峭ふして層崖疊石恰も一盆石の如し前よりその圖を

出せり 掛鞍嶋 大島 犬島 神樹嶋 漆樹島等

あり

○桂嶋 野々嶋の西南三四町よりまゝ巨嶋あり居民二

十餘戸嶋中 諫鼓崎 牛涯崎 琵琶首崎 石濱 落

皇崎等の名あり石濱は環海五口の一あり

松倉文潭翁嘗ていふ三陸中良港を開く處きい石

濱は如くものちし或は暗礁多くして不可ありといふ

説はきども他は築港をべき半費を要せざる十分

の好結果を見ざる況や運輸の便他より比する處なき

正口をやと予大は翁の説は服す野蒜新港の如きも其結

果彼が如くまゝ女川開港の説あり女川の如き港を

良きども運輸の不便いふ處より石濱の如き塩

浦に接し塩浦に鐵路已に通せり其便言を俟ざるふ

り願くは有志の人此に注目あるんことを

是より十町程隔てて 放馬嶋 其間左右は羅列するも

の 兒嶋 雛子嶋 岸屋嶋 船入嶋 水島 沖高嶋

岸屋高島 雷盆島 松崎島 駒島 子駒島 分裂島
 嶋三 鑛嶋 打鐘嶋 鷺嶋 架橋嶋 金剛嶋 言嶋二
 水戸島 舞鶴島 地藏嶋 千鳥嶋 洋孿生島二
 琦嶋 美璵嶋 巨舟嶋 問答嶋 兎島 雉嶋 潮
 乾島土人或ハ放 小潮乾嶋 茶白島等何リ
 ○放馬嶋 璵崎の前あり其間一町程ふしてこの間も
 五口の一あり一ふ青海嶋ともいふ東西十二三町南北百餘
 歩何リ是より璵崎花淵菖田松濱諸濱對大洋ヲ
 面して羅列する嶋嶼ハ 躑躅嶋大洋潮汐の衝當りて
 波濤奔觸し巖石錯碖して洞穴の奇名狀すべし

浪華島 屋形嶋 浪淘嶋 挂鐘嶋 藁槌島 立島
 帽子島 權現嶋 飛雀嶋 太鼓嶋 小鼓島 大黒
 島 小黒嶋 男子嶋 貝嶋 中嶋 洋島 松浦嶋
 鳶崎島 登嶋 天女嶋等何リ松島の景此至りて
 始て其全勝と盡せりといふなりし
 今按ぶる小松嶋の地たる曲岸回渚連抱四合して一大
 環の如し其間丘陵培壤ハ必しも論ぜざるなり四方
 峯巒の眺矚して一目萬頃あるもの固多し
 中ふも尤も奇觀と稱するものを舉げて古來四山と
 いひ五山といひ未だ定論なきり似たり予今一と

加へて六觀とあるを曰富山の六觀曰多門山の壯觀曰
大高峯の達觀曰芳山の美觀曰圓山の平觀曰扇溪の
靜觀これあり其細觀ヲ至りてハ扁舟小棹し一嶋一
嶼一崎一灣表裏項背巖洞を穿ち松根と攀ち
晨夕月夕雨に所謂烟霞痼疾泉石膏盲よりらざ
れば其美を盡すこと能はざるなり古來遊人僅ふ沿海
の勝を探るのみにして未だ宗廟の美百官の富と觀を
徒ら嚴嶋天橋と一様の觀を爲さるもの豈遺憾あり
ずや豈また松島の寛々ばや先師磐溪大槻先生
嘗て松嶋奇賞と著して曰昔人云觀山水如讀書隨

其見趣之高下是卷之成余更作三絕句以擬松嶋
月且不知後來遊者讀之果能首肯乎否大觀爭記
富春山吾眼過高自異端爲是東洋太空濶縮成盆
水假山看名區何境見天工舟子四山論未公畢竟
島廻松轉處活畫圖在泛舟中碧水丹山翠靄濃海
門帆影白重重若將画法看松嶋可做南宗做北宗
古來文人詞客其勝を詠ぜしもの枚擧するり違は
らば今い別ふ其詩歌文章と輯蒐して外篇とあし
将みその勝の絶奇を證明せんとす

水以勝言

鶴瀨學藏版

校訂	編纂	筆者	畫	同	同	地圖	石版	印刷
大槻復軒	作並鳳泉	原田鼎洲	瀧和亭	荒木寬畝	川端玉章	長命晏春	泰錦堂	竹内熊次郎

明治二十一年七月五日 印刷
 全二十一年七月廿八日 出版

著作兼
發行者

作並清亮

東京府荏原郡大井村二百四番地



印刷者

小林新兵衛

東京府日本橋區通二丁目十三番地



版權
所有

發兌元

嵩山房

東京府日本橋區通三丁目三番地

賣捌所

金港堂支店

宮城縣仙臺區國分町百三十一番地

